

大田市と三菱マヒンドラ農機が有機米の産地づくりに向けた活動を開始
大田市三瓶地区で紙マルチ田植機の実演研修会を実施

島根県大田市(市長:楢野弘和)と三菱マヒンドラ農機株式会社(本社:島根県松江市、CEO 取締役社長:齋藤徹、以下 三菱マヒンドラ農機)は、5月1日に締結した持続可能な有機米の産地づくりに向けた連携協定の一環として、5月21日大田市三瓶地区で紙マルチ田植機の実演研修会を開催しました。

研修会は大田市、三菱マヒンドラ農機が主催し、島根県が共催して開催。三瓶地区の生産者だけでなく、大田市周辺の有機栽培に意欲のある生産者や近隣自治体、JAなど幅広い関係者約60名が参加し、地域全体での有機米産地拡大に向けて理解関心を深めました。

冒頭、大田市産業振興の郷原寿夫部長より挨拶があり「まずは本年の実証を成功させるとともに、三瓶町に留まらず、市内全域で有機米の産地化を加速させていきたい」と活動の抱負を語りました。また、三菱マヒンドラ農機の浅谷祐治常務執行役員は「環境に優しく儲かる農業で地域農業の活性化につなげていきたい」として活動に対する意気込みを語りました。

その後、三菱マヒンドラ農機の担当者より、田面に敷いた厚さ約0.12mmの灰色の紙が太陽光を遮断して土中の雑草の発生・伸長を抑える仕組みを説明し、国の「みどりの食料システム戦略」で認定を受けている紙マルチ田植機で実際に田植えを行いながら作業の手順やポイントを説明しました。

実演圃場の提供者で本年初めて紙マルチ栽培に取り組む生産者の堀田明博さんは、「昨年近隣法人が試したのを見て、今回の取り組みに参加することにした。紙マルチの田植えは始めてだが、除草剤と同等の効果と聞いて期待している。安全でおいしい三瓶ブランドのお米を作っていきたい」と話しました。

2024年は今回の圃場を含む5経営体(2.41ha)で植付けを行い、カメラやセンサー、自動給水栓などのスマート農業技術も活用しながら、官民で連携して効率的な栽培技術の確立に向けて取り組む予定です。大田市と三菱マヒンドラ農機は、地域の豊かな自然環境を生かした有機米の産地づくりのため、今後も連携を密にしながら活動に取り組んでまいります。



堀田工務店さんと実証に参加される生産者の皆さん



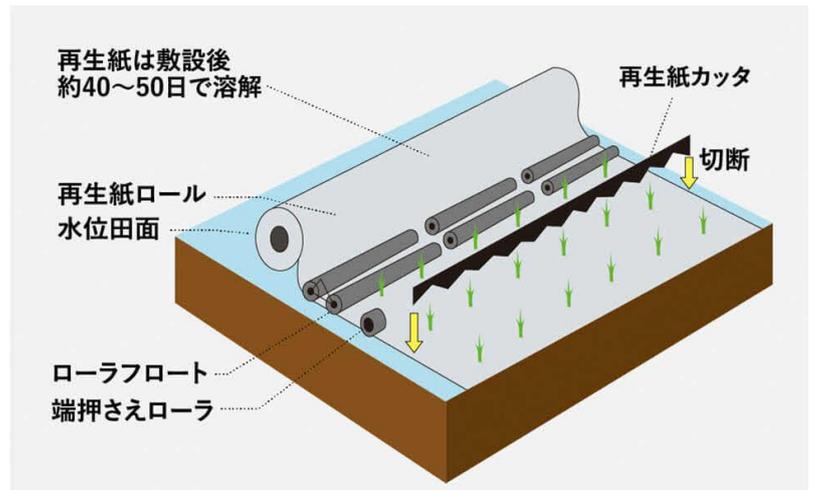
実演研修会の様子

[紙マルチ田植機について]

紙マルチ田植機は、鳥取大学農学部と三菱農機の共同研究により開発され、1997年に初めて市場導入されました。使用する紙は、様々な素材を研究した結果、溶解しやすい段ボールの再生紙を使用しており、40日から50日で溶解した紙は、そのまま土の栄養成分となります。三菱マヒンドラ農機は国内で唯一の紙マルチ田植機の製造者であり、独自のフロート構造、補助ロールの搭載構造などの特許を有しています。紙マルチ田植機は、有機農業の最大の課題である除草作業の削減・省力化を計るだけでなく、除草剤の使用を減らすことで、水田微生物や小動物など自然との共存が可能な環境保全型農業を実現します。

〈三菱マヒンドラ農機 みどりの食料システム戦略の認定について〉

https://www.mam.co.jp/news/pdf/topics_20221130.pdf



以上